

児童のテレビ視聴パターンと関連する個人差 及び家族関係の変数について

布留 武郎・飯塚 泰弘

本稿は放送文化基金により実施した「児童の認知型とテレビ視聴パターン」研究の副産物の一つである。この研究において使用した個人差と家族関係の28の変数を独立変数として、テレビ視聴パターンをどの程度予測することができるかについて明らかにするのが本稿の目的である。

Ss は武蔵野市及び近隣の小学校4校、5年生186名(男児90名, 女児96名), データを得た時期は1975年1月初め～2月初めである。

テレビ視聴パターンの指標(布留ら'75), 及びその他の変数の指標(布留'77)については、既に報告済みであるが、視聴パターンの五つの指標については再録する。他変数のそれについては適宜説明する。

テレビ視聴パターンの指標

視 聴 時 間

特別に考案した絵入り日記帖(1975年1月27日～2月2日の1週間)を与え、15分単位の時間目盛に視聴時刻を記入し、合わせて見た番組名を書くように指示した。

視 聴 番 組 型

日記帖に記入された番組を因子分析(直接ヴァリマックス法)により、3因子を抽出し、第1因子を一般娯楽型、第2因子を情報型、第3因子をマンガ型と名付け、各類型別に番組の延べ視聴本数を測度にとった。

チャンネル選択

質問紙法により、東京VHFの7チャンネル別に、最も多く見ているテ

テレビ局を一つ選ばせ、NHK型と民放型に2分類して、チャンネル選択の測度とした。

テレビ視聴パターンのほかに、児童が日常接触するマス・メディアとしてマンガ本と課外読物を取り入れた。

マンガ本と課外読物の指標

質問紙法により、最近の1ヶ月間に読んだマンガ雑誌、マンガ本の冊数及びマンガ以外の課外読物の冊数を取り、それを測度とした。この二つの変数については、前記日記帖の該当欄に、読んだ本や雑誌の題名を記入させ、一週間の冊数を測度とするインデックスを作った。質問紙法による月間の冊数との相関を求めたところ、有意ではあるが高くはなかった（マンガ 男児 $r = .42$ 、女児 $r = .41$ 、課外読物 男児 $r = .44$ 、女児 $r = .38$ ）。月間の指標は代表性において、週間のそれより有効であり、一方、週間のそれは記録の仕方がより直接的で記憶の誤りが小さい。それぞれ長短があっていずれの指標がより妥当か断定しがたいが、慣例に従い、またより代表性があるので、月間の指標を採用した。

使用した独立変数は以下の通り。

個人差

認知型：場独立型-依存型（EFT）、分析型-非分析型（CST）、衝動性（MFFT）。

知的機能：東大式A-S知能検査（言語性尺度、非言語性尺度、図形記憶、合成編差値）。S-A創造性検査A版（応用力、生産力、空想力、合成偏差値）。学業成績（文科系—国語と社会、理科系—算数と理科、4主要教科合成値）。

性格特性：学童用Y-G性格検査（情緒不安定性、社会的不適応、活動性、外向性）。依存性検査（他者からの援助や賞讃を求める、身体的接触を求める、同席を求めるなど5項目を含む検査の合成値、p.97参照）。

教師の行動評定：注意集中度、活発さ、社交性、熟慮性について5段階評定（p.96参照）。

家族関係

親子間のコミュニケーションに関するFCPテスト（協調的人間関係を奨励するか，批判的論争的態度を奨励するかを測る6項目の合成値，p. 98参照）。母親の子供に対する過保護（16項目の合成値）及び情緒不安定（2項目の合成値）に関するテスト（p. 98参照）。

結 果

1. テレビ視聴時間

1日平均テレビ視聴時間は，男児2時間26分，女児2時間8分で，標準偏差はいずれも1時間をこえ，個人差が大きい。日記法による視聴時間は若干少なめに出るのが普通であるが，筆者の研究によれば1日平均10分程度であるから，これは正確に近い数値であると思う（布留・稲生'60）。

先ず男児90名について，視聴時間を基準として，少なくとも10%有意水準に達する相関（ピアソンの相関係数）のある変数を取り上げ，段階法（Step-wise）により重相関を求めると表1のようになった。

表1 テレビ視聴時間の説明変数（男児）

	重相関(R)	R ²	単相関(r)	標準偏回帰係数(β)
FCP	.34	.11	.34**	.304**
創造性	.42	.18	-.27*	-.169
依存性	.45	.21	-.21*	-.173°
4教科成績	.47	.22	-.30**	-.203
教師：注意集中	.47	.22	-.19°	.104

°P < .10, *P < .05, **P < .01, ***P < .001 (以下同じ)

FCPから視聴時間の分散の11%が予測でき，これに創造性，依存性の個人差変数を加えると21%予測できる。FCPのβ係数は1%レベルで有意であり，これは，他の変数をコントロールしてもなおFCPがテレビ視聴時間に関して予測性をもつことを示す。

FCPが視聴時間と正の相関をもつということは，協調的人間関係を尊

重なる家庭の少年はテレビの視聴時間が長いということである。

創造性と視聴時間との負の相関は、創造性の低いほど、視聴時間が長くなることを意味する。創造性が低いということは思考の柔軟性、流暢性を欠くことである。しかしこの関係はFCPその他の変数をコントロールすると有意性が消える。

国語・社会・算数・理科の4主要教科を合成した成績も視聴時間に対して創造性と同様な関係を示している。

女兒の場合は、FCPと視聴時間の方に男児と同方向の相関がある程度みられるだけである ($r = .17, p < .10, N = 96$)。

視聴時間を他変数との相関は男女同方向を示し、男女を合わせた場合 ($N = 186$) には、上述した相関のほか、知能：言語性尺度 ($r = -.14, p < .10$)、教師：活発さ ($r = .12, p < .10$)、同：熟慮性 ($r = -.16, p < .05$) がみられる。

2. 一般娯楽型番組

この型に属する番組中、男児の視聴者の多い番組は、「8時だよ、全員集合」「太陽に吠えろ」「特ダネ登場」「マチャアキガンバレ」「刑部マクロード」等で、25%以上が見ている。女兒の場合、視聴率はやや落ちる

表2 一般娯楽型の説明変数(女兒)

	R	R ²	r	β
4教科成績	.25	.06	-.25*	-.029
創造性：応用力	.29	.08	-.21*	-.099
YG：社会的不適応	.31	.10	.18°	.096
FCP	.33	.11	.18°	.105
教師：熟慮性	.34	.12	-.24*	-.087
創造性：空想力	.34	.12	-.20*	-.071
YG：情緒不安定	.35	.12	.20°	.045
EFT	.35	.12	-.22*	-.025
教師：注意集中	.35	.12	-.22*	-.026

が傾向は似ている。

男児の場合、一般娯楽型の相関は視聴時間と全く類似しているので省略する。

女兒について、一般娯楽型を基準とする重相関を段階法により求めると表2のとおりである。

視聴時間を基準とした場合は、FCPが唯一の相関を示したが、一般娯楽型を基準にすると、多くの相関がみられる。男児と著しく異なる点である。

4主要教科の負の相関が最も高いが他の変数をコントロールすると、この相関はなくなる。視聴時間ではみられなかった相関として、性格特性と場依存性(EFT)に注目すべきだろう。一般娯楽型の番組を多くみる少女には社会的不適応、情緒不安定、あるいは場依存的なものが多いということである。

しかしこれらの相関は低く、全9変数を合わせても、一般娯楽型番組視聴量の分散の12%しか説明できない。

男女合わせた場合にみられる相関として、FCPが高くなること($r = .22, p = .003$)と、女兒においてみられた性格特性との相関が消えることに注目すべきだろう。

3. 情報型番組

この型の番組で男女とも20%以上の視聴率をもつ番組は、「スタジオ102」「ニュース」「カメラレポート」「連想ゲーム」等である。児童向教養番組はこのカテゴリーに属するが、その視聴率は低い。NHKの大河ドラマ「元禄太平記」もこのカテゴリーに含まれ、女兒では21%が見ている。

男児では情報型番組の相関は、知能：図形記憶($r = .19, p < .10$)と依存性($r = -.19, p < .10$)とにみられるだけである。情報型番組を多く見る少年は、図形記憶にいくらかまさり、他人に頼る傾向がやや少ないということである。

女兒では比較的多くの相関がみられる。段階法により重相関を求めると表3のとおりである。

表3 情報型の説明変数（女兒）

	R	R ²	r	β
教師：注意集中	.30	.09	.30**	.161
衝動性(MFFT)	.35	.12	-.23*	-.172
YG：社会的不適応	.37	.14	-.19°	-.131
知能：非言語性	.38	.14	.19°	.083
教師：社交性	.39	.15	.17°	.082
知能：図形記憶	.39	.15	.18°	.047

衝動性：MFFT 反応時間が短かく、誤答数の多いものと反応時間が長、誤答数の少ないものが、直線上の両端に位置し、中間に反応時間小—誤答数小、反応時間大—誤答数大なるものが位置するように合成された測度である（p. 102 参照）。

学級担任によって注意集中度が高いと評定された少女、及びMFFTによって衝動性（impulsivity）が低い（いいかえれば熟慮性が高い）と判定された少女は、情報型番組を比較的多く見ている。また、社会的不適応に傾く少女はこの型の番組をあまり見ないということで、この三つの変数（注意集中、衝動性、社会的不適応）から情報型番組視聴量の分散の14%が説明される。あとの3変数を加えても予測力はほとんど増さない。

男女合わせると、非言語性知能と図形記憶は5%有意水準の相関があり、注意集中、社会的不適応は1%有意水準の相関がある。しかし、衝動性は相関が消える。

4. マンガ型番組

男女ともに視聴者の多い番組は、「さざえさん」「天才バカボン」「新八犬伝」「てんとう虫の歌」等で、だいたいにおいて男児の方が多く見ている。ここにあげた番組は男児の3分の1以上が見ている。アニメーション以外の児童娯楽番組もこのカテゴリーに含まれるが、視聴量は少ない。

男児では、創造性：応用力（ $r = -.23, p < .05$ ）と4主要教科（ $r = -.19, p < .10$ ）に負の相関がみられる。この点、一般娯楽型の場合と似

ているが、そこでみられたFCPや注意集中度の相関はない。

女兒では、7変数の相関がみられ、段階法により重相関を求めると、次のようになる。

表4 マンガ型の説明変数(女兒)

	R	R ²	r	β
FCP	.26	.07	.26*	.190°
YG:情緒不安定	.33	.11	.24*	.139
EFT	.35	.12	-.23*	-.083
知能:言語性	.35	.12	-.21*	-.042
YG:社会的不適応	.35	.12	.19°	.049
文科系成績	.35	.12	-.20°	-.028
教師:注意集中	.35	.12	-.17°	.009

FCP, 情緒不安定, EFTの3変数で、マンガ型番組視聴量の分散の12%が説明できる。あとの変数を加えても殆どかわらない。

マンガ型番組を多く見る少女は、協調的人間関係を尊重する家庭の子供に多く、情緒不安定で、また場依存的接近をする傾向がある。言語能力も比較的低い。これらの特性が結合されて、マンガ型番組視聴と若干の関係をもつというわけである。

男女合わせた場合、情緒不安定性、社会的不適応性は1%有意水準の相関があり、文科系成績、注意集中度のは5%有意水準の負の相関がある。YG:活動性($r = .18$)、教師:熟慮性($r = .16$)にも、5%有意水準の相関があらわれる。しかし、一方ではFCPは10%有意水準($r = .13$)となり、EFTの相関は消える。あとの二者は相関に著しい性差があるからである。

5. チャンネル選択

日常のチャンネル選択をNHKか民放かに2分類して、NHK型0、民放型1とにおいて、他変数との相関を求めた。

男児の場合、多くの変数と相関がみられたので、段階法により重相関を

求めると表5aのようになった。

表5a チャンネル選択の説明変数(男児)

	R	R ²	r	β
創造性：応用力	.36	.13	-.36***	-.373**
CST	.43	.19	-.25*	-206°
理科系成績	.46	.22	-.24*	-.016
FCP	.48	.23	.19°	.140
EFT	.49	.24	-.26*	-.118
創造性：生産力	.49	.24	-.22*	.092
知能偏成値	.50	.24	-.20°	-.096
教師：注意集中	.50	.25	-.21°	-.063

創造的応用力, 分析的認知(CST)と理科系成績の3変数で, チャンネル選択の分散の22%が説明でき, これに, FCP, EFT, を加えると, 全分散の24%を説明することができる。他変数をコンスタントに保った場合にも, 応用力は十分に有意な予測性を残している。

応用力とは例えば新聞の用途は情報を得るという本来の役目のほかに, たきつけに使うとか, 円推状に丸めてメガホンの代りに使うとかなど柔軟な思考能力を指す。分析的認知(CST)とは, 絵の分類課題において, 対象の全体よりも, その細部に注目することを指す。民放型の少年は, この意味の応用力に劣り, また非分析的・全体的認知をする傾向をもつのである。その他の相関の正負の記号から, 民放型の少年は, 理科系成績に劣り, 協調的人間関係を尊重する家庭に多く, 場依存的接近をする傾向があり, 創造的生産力に劣ることを示している。生産力とは, 例えば, 自転車にどのような改良を加えれば, もっと便利になるかを考察する能力である。

女兒については段階法により重相関を求めると表5bのとおりである。

男児と異なる点は, 創造性の相関がみられないこと, CSTの相関が消えて, MFF衝動性の相関がみられること, FCPの相関がみられないことである。

上位3変数でチャンネル選択の分散の16%が説明でき, 残りの変数を加え

表 5 b (女 児)

	R	R ²	r	β
教師：注意集中	.31	.10	-.31**	-.248°
衝動性(MF F T)	.38	.14	.29**	.233*
知能：非言語性	.39	.16	-.21*	-.100
E F T	.40	.16	-.17°	-.071
4 教科成績	.40	.16	-.20*	.057
教師：熟慮性	.40	.16	-.18°	.30

てもほとんどかわらない。

予測性からいうと、衝動性が最も重要で、他変数をコンスタントに保っても、予測力がある。民放型の少女には衝動性の高いものが多いということで、教師の熟慮性に関する行動評定もこれをうらづけている。

男女合せた場合、E F T, 衝動性 (M F F T), 知能偏差値, 創造的応用力, 創造的生産力, 4教科成績, 教師：注意集中, 同：熟慮性, F C P が少くとも 5% 有意水準の相関を示す。正負の記号は男女を別々にみた場合と同じである。

基準としたチャンネル選択は分類尺度であるから、判別分析を使用する方が合理的であろう。しかし判別式を使用した場合も同じ結果がみられたので、前者による結果を示した。

6. マンガ本

最近 1 カ月間に読んだマンガ本, マンガ雑誌の冊数を基準としてみると, 男児の場合, 次の相関がみられた (表 6)。

母親の情緒不安定性, 担任教師による社交性と熟慮性の評定, この 3 変数でマンガ本接触の分散の 21% が予測できる。これに社会的不適応性, 教師による活発さの評定, 創造性偏差値を加えると, 全分散の 24% が説明できる。

母親の情緒不安定性は, 「彼女はそのときの気分で子どもをしかったり, 甘かしたりすることがある」 「彼女はいつも子どもの世話をやいているの

表6 マンガ接触の説明変数（男児）

	R	R ²	r	β
母親：情緒不安定	.32	.10	.32**	.271*
教師：社交性	.40	.16	.23*	.198
教師：熟慮性	.46	.21	-.27**	-.163
YG：社会的不適応	.48	.23	.19°	.126
教師：活発さ	.48	.23	.23*	.102
創造社偏差値	.49	.24	-.19°	-.156
理科系成績	.49	.24	-.20°	-.023

に、時には子どもが一人でできないとって怒ることがある」の2項目について、似ている似ていないを両極とする5点法で自己評定させ、その答を合成得点にした尺度である。

情緒不安定な母親をもつ男の子は、マンガ本を多く読むということで、この予測力は他の変数をコントロールしてもなお残存する。マンガ本に多く接触する少年は、教師の評定によると、社交性があり、活発であるが、熟慮性を欠く。このような少年はまた社会的にやや不適応であり、創造性や理科系成績がやや低い。

女兒の場合は、男児と比べて低い相関が多く、また男児とちがった相関の現われ方がみられる。文科系成績 ($r = -.17$, $p < .10$), 教師：注意集中 ($r = -.20$, $p < .05$), 母親：過保護 ($r = -.17$, $p < .10$), 同：情緒不安定 ($r = -.18$, $p < .10$) である。

母親の情緒不安定性は男児の場合とは逆に負の相関を示している。過保護も負の相関を示し、母親の情緒が安定し、過保護をしない場合の方が、むしろマンガ本に多く接触している。

男女合せると、4教科 ($r = -.15$, $p < .05$), YG：社会的不適応 ($r = -.15$, $p < .05$), 教師：注意集中 ($r = -.17$, $p < .05$), 同：熟慮性 ($r = -.24$, $p < .001$) の相関がみられる。教師の行動評定とマンガ本の接触量にこのような関係がみられるのは注目すべきである。

7. 課外読物

1カ月間に読んだマンガ以外の課外読物の冊数を基準として、相関をしらべると、男児の場合は、図形記憶 ($r = -.28, p < .01$), と母親の情緒不安定 ($r = .18, p < .10$) の二つがみられるだけである。課外読物に多く接する少年には図形記憶に劣るものが多いという関係は注目すべきであろう (偶然に符合する確率は100分の1以下である)。

女兒の場合は次の相関がみられる (表7)。

表7 課外読物接触の説明変数 (女兒)

	R	R ²	r	β
知能偏差値	.30	.09	.30**	.152
YG: 情緒不安定	.35	.12	-.24*	-.105
母親: 過保護	.38	.15	-.23*	-.128
YG: 外向性	.39	.16	.22*	.085
EFT	.40	.16	.28**	.092
母視: 情緒不安定	.41	.17	-.21*	-.083
4教科成績	.41	.17	.27**	.025

知能偏差値の相関が最も高い。場独立性と4教科成績の相関も次いで高いが、これらは知能と密接な相関をもつので、段階法によると、予測に殆んど貢献しない。知能偏差値も他変数をコンスタントにすると、予測性を失なう。

このような知的能力や、性格特性、母親の態度などが結合して、課外読物接触の分散の17%が説明できるわけである。

男女の傾向がちがう相関が多いので、両者合せた場合YG: 外向性, 教師: 活発性, 同: 社交性に10%有意水準の正の相関が現われるだけである。

8. マス・メディア指標間の相関

テレビ視聴パターンの5指標及びマンガ本, 課外読物の月間接触冊数間の相関表を作ると次の関係がみられる (表8, TVT: テレビ視聴時間, TV-I: 一般娯楽型番組, TV-II: 情報型番組, TV-III: マンガ型番組,

表8 マス・メディア指標間の相関

	TVT	TV-I	TV-II	TV-III	chan	comic	book
TVT	—	.82	.55	.41	.22		
TV-I	.81	—	.27	.20	.25		
TV-II	.54		—		-.19		
TV-III	.56	.40		—			-.37
chan		.34	-.46		—		
comic						—	.47
book					-.19	.30	—

右斜上は男児 (N=90), 左斜下は女児 (N=9)。10%有意水準に達しない相関は省略した。
 男児の場合 $r_{.05}=.21$, $r_{.01}=.27$, $r_{.001}=.34$
 女児の場合 $r_{.05}=.20$, $r_{.01}=.26$, $r_{.001}=.33$

chan=チャンネル選択, comic: マンガ本, book: 課外読物)。

テレビ視聴パターンの5指標間の関係については前報告(布留'77)で詳細に述べたので省略し, マンガ本と課外読物に注目する。

マンガ本と課外読物には男女とも比較的高い正の相関(男 $r=.47$, 女 $r=.30$)がある。課外読物のカテゴリーに含めた学習雑誌にはマンガが多いことが部分的に影響しているとはいえ, 子供の読書傾向を示唆するものとして注目してよいだろう。

男児では課外読物とマンガ型番組間に負の相関があり, 女児では課外読物とチャンネル選択に低い負の相関がみられる。つまり課外読物に多く接する少年はマンガ型のテレビ番組をあまり見ないということであり, 少女の場合は課外読物に多く接するものには, 民放型の視聴者が比較的に少ないということである。

考 察

以上の結果を独立変数別に考察してみよう。

家族関係

まず、FCPに注目したい。FCPからテレビ視聴時間、一般娯楽型番組の視聴量、マンガ型番組の視聴量（女兒）、及びチャンネル選択をある程度予測できる。さきに男児についてみたとおり、視聴量の場合は第3変数をコントロールしてもなお有意性が残存する。

つまり、協調的人間関係を尊重する母親の子供は、テレビを見る時間が長く、一般娯楽型番組を多く視聴し、民放型の視聴パターンを示すものが多いということである。女兒の場合はさらにマンガ型番組を多く視聴する傾向を示している。これはアメリカにおける研究と類似する。Chaffeeら（'71, '72）によると、FCPと暴力型テレビ番組の視聴量との関係は、社会志向的（socio-oriented）コミュニケーションを尊重する家庭の子供は、概念志向的（concept-oriented）コミュニケーションを尊重する家庭の子供に比べて、暴力型の番組を多く見ることを示している。社会志向的コミュニケーションとは、筆者がさきに「保守的・妥協的」とかあるいは「協調的人間関係を重んずる」とか述べた概念とほぼ同じであり、概念志向的コミュニケーションとは、「進歩的・批判的」と述べた概念と対応する。ただ前報告でことわったように筆者の使用したFCPの指標は、社会志向と概念志向を同一次元上の尺度として取っているし、テレビ視聴量や娯楽型番組の視聴量の指標は暴力型番組のそれと同じでないから、結果が一致するとは断定できない（p. 参照）。

Chaffeeら（'71）は、社会志向得点の次元と概念志向得点の次元を二重中央値折半法によって組合せ、社会志向高—概念志向低群を保守型（protective）と呼び、概念志向高—社会志向低群を複数価値観型（plurastic）と称している。この両者のメディア使用パターンは対照的で、保守型は複数価値観型よりテレビ視聴時間が長く、娯楽番組に多く接するのに対し、後者は前者よりテレビニュース及び新聞に接することが多いのである。そして彼等はFCPを媒介として親子でメディア使用パターンを共有すると言っている。われわれの場合と指標はちがうが結果は類似しているといえよう。

社会関係がコミュニケーション内容選択の関係として重要な意味をもって

いることは夙^{つと}に Riley & Riley ('51) が示した。われわれの場合友人関係の変数は含まないが、家族関係の変数 F C P が幼児期から思春期にかけてメディア接触パターンを規定する重要な変数であることに注目したい。

友好的な人間関係を仲間に求める子供は、テレビをその道具として使用するであろう。われわれの未発表のデータではあるが、絵画投影法によって、本研究と同質のサンプル 260 名を対象として、何故テレビを見るかについて他のコミュニケーション・メディアと比較調査したところ、「話のたねになる」「他人をゆかいにするしかたがわかる」の両項目はテレビを選ぶ比率が最も高かったのである。

ついでながら、Dembo と McCron ('76) がメディア接触パターンと関連のあることを明らかにした下位文化型の変数（街頭文化型 street culture oriented 対 学校型 educational oriented）や、また、Meyer と Baran ('77) がテレビを通じた社会行動の模倣を仲介する変数として導入した自己評価（self-esteem）も重要な友人関係あるいは個人差の変数としてあげておく。

家族関係に関する変数として扱った母親の過保護と情緒不安定は、テレビ視聴パターンのどの指標とも関係がなかった。しかし女兒の場合、過保護と情緒不安定は、それぞれ課外読物接触と負の相関があり、男児の場合、情緒不安定はマンガ本接触と正の相関があった。とくに後者では第3変数をコントロールしても、情緒不安定な母親の子供はマンガ本に多く接するという関係がみられる。母親の気まぐれさに対処するために少年はマンガ本に気分転換を求めるのであろうか。気分転換の手段として、マンガ本はテレビより利用しやすいであろう。それは何時でも、すきなときに、すきな時間だけ利用できるという消費様式（mode of consumption）をもっているからである（Feilitzen '76）。

認知型

認知型とテレビ視聴パターンの関係については、既に詳しい報告書（布留 '77）を出したので、簡単に事実だけをまとめておく。E F T は女兒の

場合、一般娯楽型番組及びマンガ型番組の視聴量と負の相関があり、課外読物接触と正の相関がある。つまり場依存的認知型の少女は、テレビの娯楽番組や課外読物に多く接する傾向があるということである。また男女ともに場依存型は民放局にチャンネルを合せる傾向がある。

場依存型の人々が友好的人間関係を志向することについては先行研究がある (Messick et al. '64 Oltman et al. '75,)。とすれば、彼らもまたテレビから友好関係に役立つ情報を獲得するだろう。これを裏付ける直接のデータはないが、前述の絵画投影法による調査結果は、かかる推論の穏当なことを示唆している。

衝動的認知型の子供には民放局を選ぶものが多く、少女の場合は、特にこの傾向が顕著である。そして衝動型の少女には情報型番組を見るものが少ない。民放局の特徴であるアクションマンガやCMはテンポの速い番組で、そのことと関係があるようである (布留 '77)。

その他の知的機能

知能偏差値は女兒の場合、チャンネル選択と課外読物に関係がある。知能の高い少女はNHK局を選び、課外読物を多く読んでいる。課外読物接触については、知能がいちばん利いている。

下位検査別にみると、非言語的思考あるいは図形記憶にまさる子供は情報型番組を多く視聴し、言語能力に劣る少女はマンガ型番組を多く見ている。因果関係には言及できないが、興味ある事実である。

創造性偏差値は、男児の場合、視聴時間とマンガ本接触に関係がある。創造性にまさる少年はテレビを見る時間が少なく、マンガ本も比較的読まない。Wade ('71) は、高い創造性をもつ子供は余暇活動が多様で、テレビを見る時間も少ないことを明らかにしているが、それを支持している。

下位検査別にみると、応用力あるいは空想力の高い少女は一般娯楽型番組の視聴が比較的少なく、応用力あるいは生産力にまさる少年はNHK局を選ぶ習慣をもっている。とくに応用力とチャンネル選択の結合は顕著で、第3変数をコントロールした場合も、応用力は有意な予測性を失わない。

学業成績とテレビ視聴時間の関係については、飯塚（'77）が詳しく報告し、男児の場合は、知能をコントロールしても、視聴時間の長い子供は4主要教科の成績が低いことを明らかにしている。

主要教科の成績が高い子供は、一般娯楽型あるいはマンガ型の番組を見ることが比較的少なく、NHK型のものが多い。課外読物を多く読み、マンガ本は比較的読まない。

性格特性

YG性格特性はテレビの番組型や読書と次の関係がある。情緒不安定性の高い子供はマンガ型番組を多く視聴し、少女の場合は課外読物に接することが少ない。社会的不適応な子供はマンガ型番組やマンガ本に多く接し、情報型番組を見ることが少ない。情緒不安定や社会的不適応がマンガと結びつくことは興味ある事実である。

さきに引用した絵画投影法による調査結果において、「心がわくわくする」「いやなことをわすれる」の項目はテレビを選ぶ率が最も高く、また「げらげら笑う」「きばらしによい」の項目はマンガ本を選ぶ率が最も高い。情緒不安定あるいは社会的不適応の子供は、不安な気分をマンガ型のテレビ番組やマンガ本によってまぎらわしているのであろうか。

YG性格検査とは別個に測定した依存性はメディア使用のパターンとほとんど無関係である。

行動評定

担任教師の行動評定はメディア使用パターンと多くの関係を示している。注意集中度の高い子供は情報型番組を比較的多く視聴し、マンガ型番組を見ることは少なく、NHK型で、マンガ本は少なく、課外読物が多い。熟慮的な行動をする子供もほぼ同様であるが、活発なあるいは社交的な子供は、マンガ本を多く読んでいる。このように子供の行動観察から、メディア使用のパターンがある程度予測されるというのは興味あることである。

引用文献

Chaffee, S. H., J. M. McLeod and C. K. Atkin (1971) Parental influences

- on adolescent media use. In Kline, F. G. and P. Clarke (eds.), *Mass Communication and Youth: Some Current Perspectives*, Beverly Hills: Sage, pp. 21—38.
- Chaffee, S. H. and J. M. McLeod (1972) Adolescent television use in the family contact. In Comstock, G. A. and E. A. Rubinstein (eds.), *Television and Social Behavior III*, Washington, D. C.: U. S. Government Printing Office, pp. 149—172.
- Dembo, R. and R. McCron (1976) Social factors in media use. In Brown, R. (ed.), *Children and Television*, Beverly Hills: Sage, pp. 137—166.
- Feilitzen, von C. (1976) The functions served by the media: report on a Swedish study. In Brown, R. (ed.), *Children and Television*, Beverly Hills: Sage, pp. 90—115.
- 布留武部, 稲生和子 (1960) 児童調査におけるテレビ視聴量の代表性に関する研究。調査研究報告5, NHK放送文化研究所。
- 布留武郎, 渡辺良, 佐賀啓男, 生田孝至 (1975) 認知型テスト日本版に関する一研究。ICU教育研究18, pp. 121—149.
- 布留武郎 (1977) 児童の認知型とテレビ視聴パターン。ICU教育研究20, pp.141—167.
- 飯塚泰弘 (1977) 児童のテレビ視聴と学業成績。放送教育研究6.7号, 日本放送教育学会, pp. 33—44.
- McLeod, J. M. and J. D. Brown (1976) The family environment and adolescent television use. In Brown, R. (ed.), *Children and Television*, Beverly Hills: Sage, pp. 199—233.
- Messick, S. and F. Damarin (1964) Cognitive styles and memory for faces. *J. of Abnorm. and Soc. Psychol.*, 69, 3, pp. 313—318.
- Meyer, T. P. and S. J. Baran (1977) Effects of pro- and anti-social TV content on children with varying degrees of self-esteem and different TV character preferences. In Ruben, B. D. (ed.), *Communication Yearbook I*, International Communication Association, pp. 319—327.
- Oltman, P. K., D. R. Goodenough and H. A. Witkin (1975) Psychological differentiation as a factor in conflict resolution. *J. of Pers. and Soc. Psychol.*, 32, 4, pp. 730—736.
- Riley, M.W. and J.W. Riley, jr. (1951) A sociological Approach to communications research. *Public Opinion Quarterly*, 15, pp. 445—460.
- Wade, S. E. (1971) Adolescents, creativity, and media. In Kline, F. G. and P. Clarke (eds.), *Mass Communication and Youth: Some Current Perspectives*, Beverly Hills: Sage, pp. 39—49.

A Study on Variables of Individual Difference and Family Relationship Related to Television Viewing Patterns of Children

Takeo Furu and Yasuhiro Iizuka

The purpose of this study is to examine to what extent the indices of individual difference and family relationship, taken in the study as independent variables, have on television viewing patterns, and the amounts of comic book and non-comic book exposure.

Method:

The Ss consisted of ninety 5th grade boys and ninety-six 5th grade girls from four elementary schools in a suburban area of Tokyo. The measures of two dependent variables—TV viewing time and program content—were obtained through a one week diary designed to complete a time table, and identify the names of the programs watched. The programs were later classified into three groups by a factor analysis. The first factor was named “general entertainment”, the second, “informative”, and the third, “animation”. Also channel preference (NHK vs. commercial TV), and the amounts of comic book and non-comic book exposure as dependent variables were obtained by a questionnaire.

The following were used as independent variables.

Individual difference

Three kinds of cognitive styles (field independence-dependence, analytic-non analytic preference, impulsivity), intelligence, creativity, schoolwork, personality traits (emotional instability, social maladjustment, general activity, extravert, dependency) and behavior ratings by teacher (attentiveness, activity, sociality,

reflection).

Family relationship

Family communication pattern, maternal over-protectiveness and maternal emotional instability.

Results and Discussion :

Family relationship

FCP (family communication pattern) was able to predict to some extent TVT (TV viewing time), TV-I (the amount of general entertainment program viewing), TV-III (the amount of animation type program viewing, only among girls) and channel preference. For girls, FCP was significantly related to TVT even when the other variables correlated with TVT were controlled.

This indicates that the children, whose mother pay high regard to conciliatory human relation rather than critical-progressive attitude, spend more time in front of TV set, watch more general entertainment type programs, and prefer commercial broadcast. And the girls have a tendency to watch more "animation" type programs.

The facts are similar to the results of Chaffee et al.'s study on the relationship between FCP (socio-oriented communication vs. concept-oriented communication) and media use. Although maternal over-protectiveness and emotional instability were little related to any indices of TV viewing patterns, for girls they had significant negative correlation with the amount of book exposure, and for boys maternal emotional instability had significant positive correlation with the amount of comic book exposure. In latter case, with the third variables controlled, the relationship that the boys, whose mother were emotionable, read more comics was showed.

Individual difference

Among girls, field dependence score had negative correlation with TV-I and TV-III and positive correlation with book exposure. Both boys and girls, field dependent children had a tendency to turn on commercial broadcasting channels.

Impulsive children tended to prefer commercial broadcast, which was remarkable for girls. Intelligence deviation value was related with channel preference and book exposure among girls. Highly intelligent girls preferred commercial broadcast and read more books.

Among boys, creativity deviation value was related with TVT and comic book exposure. Highly creative boys watched less TV and read less comic books.

The children, who had high school records for Natural Science, Mathematics, Japanese, and Social Studies, watched less general entertainment and animation type programs, and preferred NHK channels. Also they read more books and less comics.

Emotionally instable children watched more animation type programs, and the girls read less books. Socially mal-adjusted children watched more animation type programs and read more comics. It is interesting that emotional instability and social mal-adjustment is related to comic book exposure.

The children who had high ratings in attentiveness watched more informative type programs, less animation type programs, preferred NHK TV, and read more books as opposed to comics.

Reflective children had almost the same tendency, while active or socialable children read more comics.